

デイヴィッド・リヴィングストン研究の動向と展望

A Review of Studies on David Livingstone

鈴木 平*

SUZUKI Taira

Missionary, African explorer, physician, and natural scientist, and also committed to abolishing the slave trade, David Livingstone was one of the most prominent in the 19th century. There are many biographies detailing his life, and Livingstone's book business is less thriving than before, but new books and scholarly articles on him are constantly being written. He continues to be a controversial person. This paper reviews trends in Livingstone research in English-speaking countries and Japan, and highlights future challenges. A new Livingstone study, represented by the Spectral Imaging Project, shows that his diverse and vast manuscripts and other heritage provide unparalleled windows to key aspects of 19th century world history and intercultural encounters is based on the fact that the latest manuscript research offers us many perspectives. By exploring Livingstone's ideological background and illuminating his own personas he wanted, we might be able to see the new Livingstone statue as a more complex figure.

Keywords: David Livingstone, exploration, 19th century, spectral imaging

*慶慶義塾志木高等学校
Keio Shiki Senior High School

デイヴィッド・リヴィングストン (David Livingstone, 1813-1873) は、19世紀のイギリスを代表するスコットランド出身の探検家、宣教師である。アフリカ各地で伝道活動を行いつつ、ヨーロッパ人として初めて全踏破距離8000kmにおよぶアフリカ大陸横断旅行に成功した。リヴィングストンは医師、自然科学者でもあり、現地の状況を詳細に報告し、アフリカでの奴隷解放へ向けて尽力した人物でもある。自由貿易と植民地化計画を軸とするアフリカ開発構想の提唱者でもあった。

リヴィングストンの人生を詳述した数多くの伝記が出版されてきた。現在、リヴィングストンの書籍ビジネスは以前ほど活況を呈してはいないものの、彼に関する新しい本や学術論文は絶えず発表されている。リヴィングストンは議論の余地のある人物であり続けている。

本稿では、英語圏と日本におけるリヴィングストン理解の傾向と研究動向を確認し¹⁾、今後の課題について考察する。近年のスペクトルイメージングプロジェクトに代表される新しいリヴィングストン研究は、彼の遺産が19世紀の世界史と異文化の出会いの重要な側面に比類のない窓を提供しているという事実に基づき進められている。豊かな伝記研究の成果を踏まえつつ、最新のマニスクリプト研究やリヴィングストンの知的文脈の精査、また、彼の主著である探検記の編集経緯や作家としてのリヴィングストンに光を当てることを通じて可能となる、新しいリヴィングストン理解について展望したい。

I. 日本における一般的リヴィングストン理解

リヴィングストンは他界する以前の明治時代より日本でも文献のなかで紹介されるようになり、1800年代後半から1900年代初頭の時代には、次のような評価を受けるべき人物として理解が広がりはじめた。その典型は、『西国立志編』²⁾を通して語られる、苦境にくじけることなく努力を重ねた立志伝中の偉人、暗黒大陸と称されたアフリカ大陸において、数多くの地理的発見を成し遂げた探検家、キリスト教の布教に献身し、残虐な奴隷貿易の実態を世に知らしめたキリスト教宣教師という見方だ。さらにはリヴィングストンを、アフリカで革新的な公共事業を实践しようとした英傑としてとらえる動きも生まれた。内村鑑三は講演のなかで、聖書のほかに自らの

生涯に大刺激を与えた書物は2つあるとし、そのひとつが、ブレイキが執筆した『デビッド・リビグストン』³⁾であると明言し、リヴィングストンの思想やアフリカでの活動、彼が後世に及ぼした影響を高く評価している⁴⁾。

日本で最初に発表されたリヴィングストンの評伝は、有島武郎と森本厚吉共著の『リビグストン傳』⁵⁾だが、本書が執筆された1900年代前後の日本においては、リヴィングストンは立志伝の高士として語られるのが一般的だった。リヴィングストンの名が本国イギリスから世界に知れ渡ることになったのは、ヘンリー・モートン・スタンリー (Henry Morton Stanley, 1841-1904) が記したリヴィングストン発見記⁶⁾に依るところが大きく、約半世紀ほどのタイムラグを経て、日本でもリヴィングストンの地理学的業績やキリスト教伝道の意義について目が向けられるようになった。

このような日本におけるリヴィングストンの受容と評価のスタイルは、リヴィングストン理解の基本軸となり今日まで継承されている。他方、1900年代初頭以降は、英語圏で出版されたリヴィングストン関連書物が海を渡り数多くもたらされるようになったこともあり、日本でも史実に即した内容豊かなリヴィングストンの伝記と彼の著作である探検記の抄訳が出版されるようになった。戦前から戦後にかけての時代には、大英帝国の期待を背負い未開の地へ赴き、身骨を砕いて活動に徹し悲劇的な最期を遂げたリヴィングストンの姿が国民的英雄の典型として語られることが多く、啓発書でよく取り上げられる人物となった。やがて戦時色は無くなったものの、リヴィングストンは有名な武勇伝の定番として児童・少年向けの世界名作シリーズ、さらには成人教育のための教養書のなかで紹介され続けた。

明治時代から約一世紀にわたりリヴィングストンの受容と評価の歴史は培われてきた。それらを土台とした、1980年代以降今日における一般的リヴィングストン理解とリヴィングストン関連研究について、おおよそ次のような四つの傾向を見出すことができる。

第一は、リヴィングストン理解の基本軸を継承し、詳細かつ正確に記すことを目指して取り組まれているリヴィングストンの人物科学史研究だ。伝記本そのものの出版は減少したが、リヴィングストンの生き様にスポットを当てた人物史は、探検史研究書や科学雑誌、スタンリーの著作の翻訳書などにおいて

現在も発表されている。

第二は、帝国史研究、また、トラベル・ライティング研究からのアプローチだ。19世紀の西欧における探検記に代表される旅行記や冒険小説などの隆盛は、それまでの知識尊重の啓蒙的な読み物の流れを受け、未知の世界の探検が読者に有益な知識を与えるという考え方に裏打ちされていた。ヴィクトリア時代の約70年の間に大英帝国の領土は約4倍となり、アフリカ奥地や太平洋諸島などの探検が進むとともに、アジア諸国が次々と植民地化されるなど、イギリス国民の海外への関心が高まっていた。新しい世界への人々の憧れや興味に応える旅行記や冒険小説の開花は、無敵国家イギリスの国民としての自信や希望を与える帝国主義政策の拡大と表裏一体の關係にあったといえる。

このような時代背景をかんがみ、リヴィングストンと彼の後継者たちの活動と言説は、キリスト教化、商業化、文明化をスローガンとして行われた帝国主義の直接間接の実践であり、彼らは結果的にヨーロッパ列強によるアフリカ進出の火付け役となったととらえるのが、今日のリヴィングストン関連研究における理解のひとつになっている⁷⁾。

第三は、アフリカ全般の歴史の側面からの考察だ。アフリカ大陸は古くから様々な他民族と接触してきた地域であり、古代ギリシア、ローマの北アフリカ植民、アラブ人のサハラ越え交易や内陸部への進出、東アフリカ海岸での活動、奴隷を含む貿易を介しての西欧諸国とのつながりなどその史実は枚挙にいとまがない。ヨーロッパ人の植民地化は19世紀末から20世紀半ばまでの間であり、アフリカ史全体の流れのなかでは短期間にすぎないが、その影響は前例を見ないほど甚大なものだった。この時代の先頭に立ち伝道や探検活動に徹したのがリヴィングストンを代表とするような人物たちだった。彼らはアフリカ諸地域の人々の目にどのように映り、当時から今日に至る社会の変容にいかなる影響を及ぼし、それは長大なアフリカの歴史と文化においてどのように考察されるのかという観点から研究が進められている⁸⁾。

第四は、有島武郎研究の一環としてのリヴィングストン理解である。『リヴィングストン傳』初版は、有島が札幌農学校本科3年に在籍していた1900年の夏季休暇中に、自分を信仰に導いた森本厚吉と共に執筆し、信仰告白を経て札幌独立基督教会の教会員となった1901年3月にキリスト教系出版社の警醒社

書店から刊行された。二人にとって『リヴィングストン傳』の完成は、卒業記念やキリスト教信仰の証といった形式的な意味に止まるものではなく、両者の精神的一体感の発露であり、言説を共有し深化させようとする取り組みだったと考えられている⁹⁾。

『リヴィングストン傳』は有島の処女作で、青春時代に燃えさかった信仰の記念碑たる自伝だったにもかかわらず、同書重版の機会にあたって彼は、『リヴィングストン傳』第四版序言に寄せた文章のなかで約20年前をふりかえり「大言壮語を放ってゐる」ことを恥じるという¹⁰⁾。最後は、「私は私の信仰時代の凡ての先輩、朋友に対して私の袂別と感謝の挨拶を謹んで送りたいと思ふ。これから独りで出懸けます。左様なら」と結ばれている¹¹⁾。このような有島の大きな思想遍歴はどのように理解されるのかという課題は、有島研究において大切なテーマとなっている。大正デモクラシーなど自由主義的思潮を背景に人間の生命を高らかに謳い、理想主義、人道主義、個人主義的な作品を世に送り出した有島にとって、リヴィングストンと彼の探検記¹²⁾はいかなる影響と意味を持っていたのかという観点から、5年に及ぶ有島のアメリカ留学と欧州訪問の経験と合わせて、有島にとってのリヴィングストン解釈をめぐる研究が進められている¹³⁾。

II. 英語圏における研究者間でのリヴィングストン理解

ヨーロッパ列強のアフリカとの主な関係が黒人奴隷貿易にあった18世紀までは、取り引きは海岸の交易拠点でヨーロッパ人商人と現地首長との間で行われていたため、アフリカ大陸奥地への関心は比較的低かった。しかし産業革命が進行した19世紀前半に、イギリスやオランダ、フランスが相次いで奴隷貿易の禁止に踏みきり、アフリカを奴隷供給地ではなく、地下資源などの工業原料供給地と、自国製品の市場として見るようになり、アフリカ内陸部への注目が高まるようになった。当初はキリスト教の布教や知的関心から向けられていた眼差しだったが、次第にヨーロッパ列強の資本主義経済にとっての価値を探る、経済的動機が作用するようになった。

このようなアフリカ観とその変容が、19世紀前半から勃興したヨーロッパ人によるアフリカ遠征の背景にあり、英語圏においてもアフリカ探検に関する研究は活発に行われるようになった。とりわけリヴィ

ングストンの活動と言説は19世紀中葉以前より脚光を浴び、探検家、宣教師としての彼の人生を描写する伝記研究、リヴィングストンが執筆した探検記や手紙、日記やフィールドワークの記録などを活字化するという課題が、リヴィングストン研究の主なテーマとされてきた。しかしとくに初期の頃の議論は、リヴィングストンの業績を手放して褒めたたえるなど客観性を欠くものが多かった。リヴィングストンは英雄として扱われ、都合の悪い記述は慎重に削除されることもあった。その後考証の質は時とともに高まり大きく進展した。今日でも一般的には青史に名を残した聖賢としての探検家リヴィングストンのイメージは生き続けているが、研究者の間では、リヴィングストンの業績を特定の主観的な考えや評価から独立した普遍性のある見方で分析する動きが高まっている。リヴィングストンの行動や社会的役割を討究し、批判的な問題提起が行われることもある。リヴィングストンを取り巻いていた時代状況や思想的背景とともに彼を再評価するための伝記研究も進められている。

1. デジタル時代のリヴィングストンのマニュスクリプト

リヴィングストンのオリジナルのマニュスクリプトは、イギリスとアフリカの国立図書館や博物館、公文書館、古文書館などに多数所蔵されており、宣教協会など80以上の団体や多くの個人収集家たちによっても保管されていた。しかしながら1970年代までは、リヴィングストンの手稿が世界にいったいどれほど残っているのか明らかではなかった。リヴィングストンは19世紀にアフリカを訪れた探検家のなかでおそらくもっとも多忙かつ影響を与えた人物の一人であり、それゆえ、リヴィングストンが残した遺産に関心を抱く研究者たちは、彼のマニュスクリプトの正確なリストを作る必要性を感じていた。

リヴィングストン・ドキュメンテーション・プロジェクト (Livingstone Documentation Project, 以下LDPと略記) は、このような期待に応えるために始められた取り組みだった。リヴィングストンの死後100周年を迎えた1973年にエディンバラ大学で開催されたセミナーにおいて、多くの学者たちが、現存するリヴィングストンの手稿の目録作成、原本およびコピーされた資料を管理する機関の創設、また、時間とともに批判的に編集されるようになったリヴィングストンに関する文献を分析する必要性等

について議論した。最初の2つの目的に焦点を当てた活動はその後数年を経て本格的にスタートした。リヴィングストンの記念碑的なカタログ本の出版(1979年¹⁴⁾、1985年¹⁵⁾)と、プロジェクトの歴史を詳説した論文¹⁶⁾の発表は、LDPの努力の結晶と言える。

これらの取り組みを通じ、リヴィングストン研究にとって重要な次のような事実が光が当てられることになった。第一に、それまで知られていた以上に、リヴィングストンが健筆家だったことが示された。第二に、リヴィングストンのオリジナルの原稿がまだ相当数世界に存在していることが明らかとなった。それらの一部を挙げるならば、例えば数千通にのぼる手紙、11種に分類することができる重要な日誌、約40冊の日記帳と18冊のフィールドワークの記録ノート (リヴィングストンはフィールドワークの際に野外で記録ノートを記し、それらを改めて日記帳に転記するという方法をとっていた。¹⁷⁾)、30本以上の論文とレポート、約200点を数える断片的なマニュスクリプトなどだ。第三に、このカタログ作成により、リヴィングストンのこれらの貴重な資料が世界の様々な国と地域に散らばっていることがわかった。それらは90か所以上にのぼり、イギリスはもとより、ポルトガル、フランス、ニュージーランド、アメリカ、アフリカ諸国に及んでいる。いまだ知られていない多くのリヴィングストンの手稿が個人によって保管されていることも明らかとなった。LDPの活動は意欲的に進められ、結果として、世界に現存するリヴィングストンのマニュスクリプトのかなりの部分を、オリジナル版とコピーされたものも含めて、スコットランド国立図書館が包括的に管理することになった。LDPが推進してきたプロジェクトの理念と作業は、2005年にリヴィングストン・オンライン (Livingstone Online¹⁸⁾) によって引き継がれた¹⁹⁾。

リヴィングストン・オンラインは、リヴィングストンが残した多数の手稿や視覚資料を調査分析し、それらの閲覧サービスを提供しているデジタル博物館および図書館だ。その創設と運営に関わる専門家たちの豊かな学識と国際協力のもと、リヴィングストンの活動、旅、人々の記憶、それらの歴史的、文化的背景の実際を明るみにすることに成功し、アフリカの歴史、大英帝国、19世紀の異文化間の出会い、そしてデジタル人文科学の実践等を研究するための主要な学術リソースとしてその地位を確立してきた。ウェブサイト内では、高解像度で初めて復元された

リヴィングストンの手稿や、故意に編集が重ねられた探検記の原稿の画像などが多数紹介されている。これらのデジタルコレクションは、イギリスからアフリカへ単身で渡り、歴史にその名を刻むこととなった人物に関するインターネット上の情報としては世界最大規模のものだ。

現存するリヴィングストンの原稿は幅広いトピックを網羅しており、多くの閲覧者にとって教育的、学術的価値を有している。リヴィングストン・オンラインはこれら膨大なコレクションを丁寧に整理保管し、調査の過程で明らかになった興味深い事実や資料を公表している。

他の追従を許さないこのプロジェクトの特色は、マニュスクリプトの解析に最先端のイメージング技術を駆使していることだ。それはマルチスペクトルイメージング (Multispectral Imaging, MSI) というもので、赤外線や紫外線などの光を捉えることで、肉眼や従来の高解像度カメラでは認識できなかった文章まで見ることが出来る技術だ。リヴィングストン・オンラインはこのテクノロジーを応用し、腐敗したり薄れてしまって判読不可能だった過去の文章の筆跡を読み取ることに成功した。視覚に訴える豊かなウェブデザインとともに、リヴィングストンが生きた世界を蘇らせることで、彼の思想や活動と、19世紀の世界史との接点に関する研究と議論を促進している。遺産が生み出された背景を分析し、リヴィングストンの思想が時とともにどのように変遷したのか、その過程を探究することに寄与している。人文科学における研究、教育、保護、公的な計画のために設立された全米で最大の基金「全米人文科学基金」(The National Endowment for the Humanities, NEH) は、創設以来50年の間に出資したプロジェクトのなかでもっとも優れた取り組みのひとつであり²⁰⁾、人文科学の在り方を変えた研究を代表するものとしてリヴィングストン・オンラインによるマニュスクリプト復元作業を挙げている²¹⁾。

巨大なアーカイブを管理分析するリヴィングストン・オンラインは、リヴィングストン研究者のみならず、科学者、ライブラリアン、学芸員、コンピュータープログラマー、およびプロジェクトを可能にした他分野の専門家たちによる、国境を越えた献身的助力により初めて可能となった。その活動の継続的な発展は、各国の図書館、博物館、美術館、諸大学との共同作業にも依っている。19世紀の旅行記原稿の分析とそれが果たした社会的役割の考究において

新しいフロンティアを開いたリヴィングストン・オンラインは、今日読み取ることができなくなってしまった貴重な歴史的古文書から、新たな記述をイメージング技術によって発見するという、世界レベルで取り組まれるべき共同プロジェクトの先例として期待されている。リヴィングストンの思想と活動の歴史は人類共通の文化遺産の一部であり、多方面における研究に貢献するだろうと考えられている。

2. リヴィングストンの遺産の潜在的可能性

今日、英語圏の批評家や歴史家の多くが、19世紀のもっとも重要な大英帝国のトラベルライターの人としてリヴィングストンをとらえている²²⁾。リヴィングストンの探検記や日記、フィールドワークの記録が、ヨーロッパの帝国主義と植民地主義、アフリカの歴史、そして19世紀の奴隷貿易の実態を明らかにしているからだ。リヴィングストンの眼差しと彼が残した数々の言説は、大英帝国がどのように創造され管理運営されたのかを理解するのに役立つ。腐敗や劣化してしまった断片的な手稿も含めて、リヴィングストンのマニュスクリプトは、ヴィクトリア時代に世界全体で政治的および科学的ネットワークがどのように機能していたのかを示す重要な資料と考えられている。

原稿のなかでリヴィングストンは、アフリカの人々の文化と自然地理、つまり現地の社会、言語、宗教、政治、技術、自然環境について詳述している。彼が残した記録の内容は世界でも類を見ないものであり、歴史家のロイ・ブリッジは、リヴィングストンは「ある特定の時代のアフリカに関する、主要かつ唯一の情報源である」と述べている²³⁾。そのため現在リヴィングストンの探検記とマニュスクリプトは、広範な学術分野の優れた資料と考えられている。ここ数十年の間に研究者たちは、リヴィングストンの主要なテキストと原稿を調査、活用し、例えば以下のような多方面にわたるテーマへと研究を広げている。

- ・マラウイにおける宣教活動の影響²⁴⁾
- ・南アフリカのアパルトヘイトイデオロギーの起源²⁵⁾
- ・熱帯アフリカのリヴィングストンと真菌について²⁶⁾
- ・東アフリカの商業帝国における奴隷制の役割²⁷⁾
- ・ヴィクトリア時代の出版業界における共同編集の実践²⁸⁾

- ・ボツワナのボテティ川沿いの貿易とその起源²⁹⁾
- ・植民地時代前のアフリカにおける栄養失調の有病率³⁰⁾
- ・ヴィクトリア時代の地理学的談話に対するアフリカ人の貢献³¹⁾
- ・19世紀の南部アフリカの気候変動³²⁾
- ・中央南部アフリカの州庁舎³³⁾
- ・熱帯環境の眼科学的影響³⁴⁾
- ・19世紀の科学的知識の発展に果たした旅行の役割³⁵⁾
- ・ヴィクトリア時代の旅行記におけるイラスト技術の進歩³⁶⁾
- ・東アフリカの都市化と中央アフリカの村落市場経済³⁷⁾

これらの研究の幅広さは、180年の時を超えリヴィングストンが私たちにもたらす情報の重要性を示している。彼が残した曠古なる遺産の全容解明にはまだ多くの時間と努力が必要とされるが、復元された手稿を精査することで、私たちは19世紀における科学的知識と、アフリカ諸国とイギリスとの関係について、以前よりはるかに理解を深めることができるだろう。

Ⅲ. 今後の課題—新しいリヴィングストン理解を展望して

リヴィングストン生誕200周年が過ぎ早7年目を迎えようとしている。英語圏では19世紀中頃より築かれてきたリヴィングストン理解の豊かな歴史があり、イメージング分光法やマルチスペクトル画像処理などの技術が応用され、失われていたリヴィングストンの言説が蘇り始めたことにより、今日のリヴィングストン研究は新たなステージを迎えた。日本においても、伝記研究のみならず多面的な観点からリヴィングストンに関する考察は行われてきた。とくに有島の『リビングストン傳』をめぐる議論は、日本独自のリヴィングストン分析と言えるだろう。

リヴィングストンの先行研究の渉獵を通して得られる知見を相互に関連づけながら、私自身が展望する、とくに日本においてまだ精力的に取り組まれたことのない新しいリヴィングストン研究の3つのテーマについて概括したい。

1. リヴィングストンの知的文脈の精査

先に確認した通り、リヴィングストンの伝記研究

やイギリス帝国史研究では、リヴィングストンの活動を帝国主義の実践であるとし、ヨーロッパ列強によるアフリカ争奪の糸口となったと考えるのが一つのスタイルとなっている³⁸⁾。

転じてリヴィングストン自身に目を向けて見れば、彼は諸国のアフリカへの進出を促すために宣教と探検に身を投じたのではなく、むしろ研究史が教えるように、1840年にロンドン宣教協会に入会し宣教師となったが、この時期に出会ったイギリス国会議員で奴隷解放論者、社会改革者のトマス・フォウエル・バクストン (Thomas Fowell Buxton, 1786-1845) の人道主義、互惠主義から大きな影響を受けていた³⁹⁾。バクストンは奴隷貿易反対運動の中心人物であり、1840年6月1日にアフリカ文明化協会 (African Civilization Society) を設立し、とくに西アフリカの社会改革による奴隷貿易の根絶を目指して活動していた。彼はキリスト教化、商業化、文明化による西アフリカの社会改革で達成される奴隷貿易の廃止が、人道的にはもとより経済的にもアフリカとイギリスの双方に利益があることを強調し広範な支持を獲得していた⁴⁰⁾。リヴィングストンはロンドンでバクストンの講演を聴き強く感銘を受けた。その後リヴィングストンが提案し続けたアフリカ開発構想とバクストンの計画との類似性から、リヴィングストンは純粋なバクストン主義 (Pure Buxtonism) 者とも考えられている⁴¹⁾。

バクストンが主張するアフリカ救済策の具体的な構想を、自ら取り組むべき計画としてリヴィングストンが受け入れることを可能にした背景には、彼が長年深く関わった故郷の綿紡績工場とその共同体で培われた経験があった。リヴィングストン一家が住み、働いた、グラスゴウ郊外にある街ブランタイア (Blantyre) の工場労働者用住宅や綿紡績工場は、ロバート・オーウェン (Robert Owen, 1771-1858) の義父であるデイヴィッド・デール (David Dale, 1739-1806) が創設したニュー・ナラーク (New Lanark) の関連施設であり、分工場だった。リヴィングストンは10歳のときから約10年間糸継ぎ工 (断糸継工 piecer) として働き、工場併設の夜間学校で熱心に学んだ⁴²⁾。彼が働き始めたのはデールが他界して7年後だったが、工場の体制と併設学校での教育システムはデールの頃と変わらなかった。リヴィングストンは、工場労働はひどく骨が折れるものだったけれども、そのときの経験が自分を支えていると述べている⁴³⁾。歴史家アンガス・カルダーは、「博

愛的事業家にして会衆派のデールは、ブランタイアから数マイル離れた地に住んでおり、リヴィングストン家にとって重要な隣人だった」ことを指摘し、「リヴィングストンの社会的良心はこの時期に形成されたといってよいだろう」と述べている⁴⁴⁾。

さらにリヴィングストンの活動の背後には、19世紀スコットランドの福音派教会を中心とした自然神学と科学をめぐる知的系譜があった⁴⁵⁾。ロンドン宣教協会の構成メンバーの大半は会衆派であり、リヴィングストンもその一人だった。会衆派は1843年の大分裂によって福音派が設立した自由教会（Free Church）に含まれる。この自由教会を創立したトマス・チャーマーズ（Thomas Chalmers, 1780-1847）は、リヴィングストンの思想に間接的ではあるが深い影響を与えた人物だった。チャーマーズは工業都市グラスゴウの貧困問題の解決に取り組んだが、貧困という社会問題は救貧法等の行政的手段によってではなく、キリスト教信仰を土台にした自助と慈善活動によって解決されるべきだとする彼の主張は、多くの人々から支持され成果を上げていた⁴⁶⁾。同時に、信仰と科学は衝突せず、科学研究はキリスト教にとって有益であるとするチャーマーズの科学思想は⁴⁷⁾、同じくスコットランドの聖職者にして天文学者でもあり、チャーマーズの信奉者であったトマス・ディック（Thomas Dick, 1774-1857）を媒介として、リヴィングストンへと流れ込んでいった。

このようにリヴィングストンは、とりわけスコットランド的な思想系譜のなかで育ち、その大きな影響のもとアフリカでの諸活動を展開したが、一方におけるアフリカ文明化の遠大なヴィジョンと、他方における、彼の死後に展開されたイギリスとアフリカとの関係をめぐる歴史の現実との間には大きな乖離が生じることになる。既存のリヴィングストン観は、帝国の成長と発展という歴史の長期的現実への志向をリヴィングストン思想それ自体の中に読み込み、その思想を大英帝国の思想の源泉と見なすという問題性を多かれ少なかれ内包している。

そこで、日本においてのみならず英語圏においても十分に議論されてきたとは言い難い、従来とは異なるリヴィングストン研究の第一の課題として、上記のような思想系譜を担うリヴィングストンのアフリカ開発構想が、彼と同時代の人々、とくにアフリカと関わりが深かった宣教協会や慈善家たち、外交関係者や政治家等によって受容されるなかで、どのように継承あるいは変質していったのかという問題

を念頭に置きつつ、リヴィングストン自身の活動の本来の意図と思想的源泉について考究したい。探検記や書簡、日記等の実証研究の成果を取り入れながら、リヴィングストンの知的文脈を思想の形成過程にまで遡ることで開示すること、ここに第一の課題の特色がある。

2. 有島武郎とリヴィングストンの接点についての思索

本稿Ⅲの1で提示した第一の課題を通じ確認されるリヴィングストン像を踏まえながら、今後、とくに日本において取り組まれるべきリヴィングストン研究の第二の課題として、有島武郎とリヴィングストンの新たな接点の可能性について考察したい。そのための資料として、有島が「第四版序言」の脱稿から3年目の1922（大正11）年に、父から受け継いでいた北海道の羊蹄山麓に広がるマッカリベツ原野にあった広大な有島農場を、小作人たちに無償で解放したという史実にあらためて目を向けてみたい⁴⁸⁾。

父が他界した後有島は、所有していた農場を、全小作人たち（約70戸）に対し、土地を農民全員で共有して農業を続けることを条件に手放すことを明言した。有島は農場内の弥照（いやてる）神社で小作人たちを前に、これからは相互扶助の精神で力を合わせて生きてほしいと呼びかけた。有島は解放の主旨をこう記している。

「誰でも少し物を考へる力のある人ならすぐわかることだと思ひますが、生産の大本となる自然物、すなわち空氣、水、土のごとき類のものは、人間全體で使用するべきもので、あるいはその使用の結果が人間全體に役立つやう仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によつて私有されるべきものではありません。しかるに今の世の中では、土地は役に立つやうなところは大部分個人によつて私有されてゐるありさまです。そこから人類に大害をなすやうな事柄が数えきれないほど生まれてゐます。それゆゑこの農場も、諸君全體の共有にして、諸君全體がこの土地に責任を感じ、助け合つて、その生産を計るやう仕向けていつてもらひたいと願ふのです。」⁴⁹⁾

有島は1903（明治36）年からのアメリカ留学中、信仰に動揺を覚え、社会主義思想にふれ、ピョートル・クロボトキン（Peter Kropotkin, 1842-1921）の無政府主義にも傾倒した。3年間の留学後、欧州をまわって帰国し、第一次大戦後の社会状況下で有

産階級であることに苦悩を深め、農場解放を行った(翌年の1923年、波多野秋子と心中した)。有島はクロボトキンを直接訪問しており、その著作の愛読者でもあった。小作制度の矛盾を自覚していた有島にとって、不在地主の利益至上で人々を苦しめるばかりの農場の存在は心の負担になっていた。

有島が敢行した農場解放と共生農団の展開は、北海道史における初の農地所有制度の改革、自作農創設事業であったばかりでなく、日本の社会事業概念胎動期における思想的潮流の一つの実践例であり、戦後本格的に進められた農地改革の先駆けとなる取り組みだった。

有島とクロボトキンとの関係については、文学や社会思想の側面から先行研究の蓄積がある⁵⁰⁾。いっぽう有島とリヴィングストンに関する考察は、キリスト教信仰がキー概念となっており、相互扶助思想という観点から両者を結びつけてみるという問題意識とは異なる研究モチーフに支えられてきた。例えば、有島の書く人物論は、他者の考察である以前に実は他者に仮託しての自身の「生き方宣言」であり、『リヴィングストン傳』における信仰告白はその好例であるという⁵¹⁾。あるいは、「第四版序言」執筆時の有島にとって、『リヴィングストン傳』に描き出されたリヴィングストン像は「ステレオタイプ化された偉人(立志伝中の偉人という枠に止まらず、キリスト教信仰者としてのリヴィングストンも含めて)の一人に後退してしまい、有島においては、リヴィングストンはすでに通俗化された人物であり、注目すべき何らの価値も持っていないかった」という見方もある⁵²⁾。

政治思想家にして地理学者、社会学者、生物学者でもあったクロボトキンは、ダーウィンの道徳起源論をさらに進めて人間社会を考察した人物でもある。クロボトキンは一般にはアナキストの革命家として知られているが、ロシアでの革命家としての活動は1880年半ばで終わっている。その後イギリスに亡命し執筆活動を行い、1902年に発表したのが『相互扶助論』だった。ダーウィンの進化論の影響を強く受けながらも、その適者生存の原則や、不断の闘争と生存競争を批判し、生命が進化する条件は相互扶助にあることを論証した本だ。

クロボトキンは本書発表後、相互扶助というテーマについてさらに補足したいこと、発展させて考えたことなどを9編の論文にまとめているが⁵³⁾、そのうちのひとつ「進化論と相互扶助」のなかで、リヴィ

ングストンの活動と探検記に言及しながら書かれた、生物の適応過程に関するダーウィンの書簡を取り上げている。クロボトキンはその内容を詳細に分析し、「この書簡は1868年に書かれたものだが、非常に示唆に富んでいる」と述べている⁵⁴⁾。

クロボトキンは進化論者の間で主流だった個体間の生存競争の重要性を否定し、むしろ生物が集団内でともに助け合いながら、環境に対して生存の闘争を繰り広げているとした。このような生物社会の本質に根差した人間の生き方、社会のあり方を追求したのがクロボトキンの道義科学と協同社会の構想だった。

ディックに傾倒していたリヴィングストンは、神が創造した世界のフィールドワーカーのごとく活動することを願い、自然科学を学んだ。そしてチャーマーズと同様、世界の複数性論の論法において反進化論の立場をとっていた。さらにリヴィングストンは、19世紀のイギリスを代表する生物学者、比較解剖学者、古生物学者で、ダーウィン進化論への熱烈な反論で知られるリチャード・オーウェン(Richard Owen, 1804-1892)から直接生物学思想を学び、長年にわたり交流を深めた。そして実際にアフリカの人々と接するなかで、人類の不可分性を支持する姿勢が強固となった。人種間の差異を認める見地こそ、現存する奴隷貿易の元凶のひとつだと考えたリヴィングストンは、自然科学者として『種の起源』に関心を抱きつつも、奴隷市場の存在に理論的根拠を与えることが懸念される進化論を受け入れることはできなかった。この理念が根幹部分を成し、リヴィングストンのアフリカ開発構想は確固たるものとなった。彼の構想の具体的な実施策は、イギリスからの入植者によって進められる植民地創設事業だった。

リヴィングストンが理想としたアフリカの植民地は、アフリカの人々にキリスト教と商業を教え広めることにより現地の文明化を進める宣教地であるとともに、イギリス人の指導のもと現地の人々が奴隷貿易に代る交易品を生産し、アフリカとイギリス双方に経済的利益を生み出すことが期待されるモデルファームとしても構想されていた。リヴィングストンにとって植民地とは、現地社会が保護を必要とする間はイギリスからの入植者によって開墾と整備が進められるが、イギリスが支配するところではなく、最終的にはアフリカの人々が完全に自治権を持つことが約束されている地域であり、創設時から一貫し

て相互扶助の精神で営まれる共生農場だった。

有島とリヴィングストンは、国も時代も異なるが、相互扶助の精神、共生農場創設への希求という共通点を持ち、クロボトキの道義科学と協同社会の思想を紐解くことで、二人の距離はより近いものとなる。有島の生き方に対する意識には変遷があったが、その過程のなかで立ち現れるリヴィングストンは、あるいはまた有島思想にとって、静かに流れる底流のような存在だったと考えることはできないか。二人の思想と実践の共通点を手掛かりに、有島とリヴィングストンの接点の可能性について考察したい。

3. 『南アフリカにおける宣教師の旅と調査』の編集と作家リヴィングストンについての考察

新たなリヴィングストン理解のための第三の課題として、出版業界における被写体としてのリヴィングストンではなく、作家としてのリヴィングストンを追跡することを試みたい。リヴィングストンの主著である探検記『南アフリカにおける宣教師の旅と調査』⁵⁵⁾(以下、『宣教師の旅』と略記)は、1857年に出版されるやいなや商業的に大成功をおさめた⁵⁶⁾。いっぽう、日本はもとより英語圏においても、今世紀初頭まで、『宣教師の旅』の誕生について積極的に詳細な分析が行われてきたとは言い難い。先に確認した通り、長きにわたりリヴィングストンのマニュスクリプトの調査を阻む克服しがたい問題があったため、リヴィングストンの著作がどのように世へ送り出されたのか、そのプロセスを正確にたどることは不可能だった。そのためリヴィングストンの作家としての側面にはあまり目が向けられてこなかった。しかし私たちは幸運なことに、近年応用されるようになった科学技術により、失われていたリヴィングストンの手稿の一部を見ることができるようになった。リヴィングストンと出版社とのやりとりに注目し出版までのプロセスを辿ることで、『宣教師の旅』が社会に受容されるべく編集された経緯を確認し、『宣教師の旅』をベストセラー本へと導いた理由は何だったのかという問いについて考察したい。そのことを通じ、リヴィングストン自身が示そうとした彼のペルソナにも光を当てることができるだろう。この第三の課題の解明には、以下に述べる諸事実が手がかりとなる。

(1) 多面的テキスト

リヴィングストンの著作のもっとも顕著な特徴の

ひとつがその多様性であることは興味深い。『宣教師の旅』が扱っている内容は幅広く、そのことが本書を特定のジャンルに分類することを難しくしている。もちろん基本的には旅行記だが、そのカテゴリー越えて様々な側面を持っており、まさにハイブリッドな文学形式をとっている作品であることは注目すべきことだろう。本書は、現地の人々がキリスト教徒になる前となった後の様子を比較することで、神の福音が及ぼす変革的影響力を高らかに宣言するような典型的な改宗の物語をあまり含んでいない。本文の大半において、リヴィングストンは自身を壮大な冒険物語によって描くことを拒み、武勇伝の主人公として特徴づけることを慎んだ⁵⁷⁾。いっぽうで、流血を伴うような突飛な狩猟のシーンやアフリカ諸民族との危険な出会いについての記述は、テキストに迫力を与え、読者に心躍るスリリングな瞬間を提供するために効果的だった。リヴィングストンはこれらのエピソードが持つ英雄的な性質を、直接的には極力利用しなかったが、そのような話題を挿し挟むことで、多くの読者が叙事詩作品として彼のテキストを解釈することになった。実際リヴィングストンの物語の声の「沈黙」は、彼の英雄的な評判を高めるのに役立った⁵⁸⁾。同書はまた、博物学の書物でもあり、地図製作のための測定記録や動植物学、民族学に関する詳細な説明で満ちている。さらには、随所に渡ってバクストンの商業とキリスト教の思想や、典型的な奴隷制廃止論者の主張を表明している。アフリカの資源開発のためのヴィジョンを提示することで、『宣教師の旅』は「実行可能なプロジェクト⁵⁹⁾」、「実践のためのマニフェスト⁶⁰⁾」としての役割を果たした。あるいはエイドリアン・ウィスニキが述べるように、イギリスが介入するにあたって魅力的な土地として大陸を説明する「行政文書」だった⁶¹⁾。したがってリヴィングストンは、『宣教師の旅』のなかで多様な顔を持つ人物として立ち現われることとなり⁶²⁾、彼の旅行記は、地理学者、地質学者、民族学者、博物学者、医師、天文学者、商人、キリスト教の博愛主義者、そして帝国政策に関わる人々、いずれからも注目されることになった。人々の多岐にわたる関心に対応するテキストを目指し、リヴィングストンは自身のイメージ作りに努め、彼が振りまいた魅力によって読者のすそ野を広げることに成功した。

(2) リヴィングストンのこだわり

リヴィングストンはスケッチが上手ではなく、資料となりうる視覚的なデータを制作するのが苦手であり、読者がアフリカを想像しやすくするためには、幅広い情報源から本文に適切な画像を収録する必要があった。最終的に『宣教師の旅』に挿入されたイラストの多くは、彼の経験に基づく説明に従い、画家によって描かれることとなった。リヴィングストンはイラストについてかなり厳格な基準を持っていた。完成したスケッチに、彼は事実即して描かれたことの証として注釈を入れ、それに関し出版社への指示も怠らなかった。リヴィングストンは著作が人気を博すことを望んでいた一方で、あまりにも一般受けする本になることを警戒してもいた⁶³⁾。彼は本文の内容を徹底的に吟味し、男らしいスタイルだと感じるものを追及して活動した。リヴィングストンは力強い文体、読者の興味をかきたてるような内容、そして本格的な旅行記であることを示すために男性的な散文を求めた。

『宣教師の旅』は、現代の一部の読者には、ときに単調であると感じられるかもしれない。しかし本のそのような特徴は、当時は多くの人に美德であると考えられた⁶⁴⁾。批評家は彼の文体を評価しただけではなかった。むしろ彼の飾り気のない言い回しにより、この本は何か重要なことを示していると理解されたのだった。すなわちその内容の真実みである。リヴィングストンは話を誇張したり刺激的な表現を用いるような努力はしていないが、そのことにより、かえって彼の著作は高く信頼できる物語と見なされた。カレドニアン・マーキュリーは次のように評している。「リヴィングストンは、もっともスリリングな冒険を語る時でさえ、口調は控えめで気取っていない。この方法は疑いを解いたのだ。彼の分厚い本によって提供された様々な証拠は徹底した誠実さによって記されており、どんな疑問の声も沈黙させるのに十分である。⁶⁵⁾」 いっぽう、『宣教師の旅』が真実味のある旅行記として評価されたということは⁶⁶⁾、皮肉なことに、それが幻滅の対象となったことをも意味する。後にリヴィングストンは、探検の困難さやアフリカの自然環境の厳しさを控えめに表現したがゆえに、かえって大陸の可能性を大げさに宣伝したと非難されることにもなった⁶⁷⁾。

(3) テキストの検閲

『宣教師の旅』をめぐるさらなる事実として、最

終的にテキストが社会や時代になじむよう検閲されたという史実に目を向けたい。様々な検閲がなされたが、ここではその例として、リヴィングストンが本の冒頭で記している自伝と、植民地政策に関する彼の発言の一部をとりあげる。『宣教師の旅』の序章で記されている自伝のなかで彼は、労働者階級の出身であることと、自らの精力的な自助努力に焦点を当てている。彼は自分の生い立ちをスコットランドの貧困者階級と考え、そのような人々を代表する者として語っているかのように見える。このことは、出版されたテキストの内容には該当するかもしれないが、実は原稿では、リヴィングストンが社会階級について述べた重要な部分が削除されていた。そのような箇所では彼は、スコットランドの貧しい人々がおかれている状況を真剣に考慮し、工場での生活は「白人奴隷」のようだという指摘について議論している⁶⁸⁾。彼の最初の原稿は、搾取的な事業者に向けて強く警告を発しているかのように見える⁶⁹⁾。検閲の理由は明らかだと思われる。削除された箇所ではリヴィングストンは、労働者は「大きな社会悪の被害者」であり、「多くの場合、あまりにも低すぎる賃金を支払われている」と主張している。多数の人たちが安心して読めるテキストは、虐げられた社会階級に関わるトピックを編集することで生み出された政治的産物だった。リヴィングストンは原稿の一部を削除することで、労働者たちは社会階級について議論するような革命的な人々ではないことを読者に保証した。彼は論争から身を引くことになり、自らの書物にその市場を確保することになった。

植民地政策に関するリヴィングストンの発言に目を向けてみよう。最初の原稿のなかで彼は、ケープ・コーサ戦争に対し長い激論を書いていたことがわかった。南アフリカの東ケープ州で起きた、コーサ人とヨーロッパの入植者たちの長期にわたるこの一連の国境紛争について、リヴィングストンは説明のみを提供すると述べているが、実際には20ページ以上に渡り、植民地入植者と帝国の政策について抗議を展開していた⁷⁰⁾。しかしこの長い批判は、最終的に出版の際には完全に削除された。

発見されたリヴィングストンのオリジナル原稿の一部に目をとめただけでも、彼が検閲を許さなかったならば、『宣教師の旅』はどのような物語になっていたのだろうかという疑問がわく。削除された部分に明らかに含まれていたトピックとしては、例えば植民地軍の活動に対するリヴィングストンの姿勢

があげられる。植民地で行われていた行為は、リヴィングストンいわく、「もっとも血生臭い心が望む」ような厳しく残酷なものであり、かつ非現実的でもあった⁷¹⁾。

リヴィングストンは、紛争の根底にある原因を説明するため次のようにも述べている。「政府、または一部のフロンティア的な住民が犯した不正義や攻撃を棚に上げ、我々の野蛮な隣人の盗み癖を非難する者がいる。」「現地の人々は文明と接触することでむしろ悪くなっており、良くはなっていない。」「この土地を年々白人たちが侵略していることを把握している。正直が美德の一つであることを黒人に教えることができる可能性は低くなっている。」なかでも興味深いことは、彼が「黒人たちが言うこと」に大いに注意を払うべきだと強く主張していることだ⁷²⁾。リヴィングストンは、人類が望むもっとも高い立場として、「祖国」が負担すべき責任をはたしていることに満足していると述べるいっぽう、国境紛争に対するアフリカ側の実情と意見を考慮すべきだと繰り返し訴えている。「我々は黒人の苦悩について、一方の側の疑問のみ知っている。双方の当事者から話を聞いてみよう。」「我々は黒人側の声に耳を傾けたことがないのだ。」⁷³⁾

『宣教師の旅』のオリジナル原稿が、アフリカ人たちの権利や植民地で横行していた不正義に関する話題を含んでいたことは明らかなだ。それらを削除したことを知るための手がかりは乏しく、実際に検閲の背後にいたのは誰だったのかを特定することは難しい。本の売り上げを気にしていた出版社のジョン・マレーがそれを奨励した可能性はある。編集という行為の意味の重さを考えると、やはりリヴィングストンは強く抗議したのではないかと想像される。どちらにしても、反植民地、反イギリスの書物として読まれる可能性があるという思いから、政治的判断で削除されたのだ。それはおそらくリヴィングストンが望んだ、アフリカ大陸へ投資することを期待できる人々が、彼の著書から遠ざかることを防ぐためでもあった。結果的に多数のページが削除されることになったが、その同じ時期に、ロデリック・マーチソンがリヴィングストンを中央アフリカの領事に任命するよう外務大臣のクラレンドン伯爵を説得したという事実は興味深い。リヴィングストンがこのことを事前に知っていたかどうかはわからないが、彼は当時の体制にますますつながりを持つようになったため、論争を避けるために注意を払ったことは確

かだろう。

このような検閲は、『宣教師の旅』がヴィクトリア時代の人々の植民地に対する理解に与えた影響を考えると重要なことだ。様々な意味でそれは帝国主義の到来を予期するものだった。ウィスニキが論じるように、この本は、「イギリス国民の神聖なる世俗の欲望に応える方法で、南部アフリカの文化や自然地理をマッピングした。イギリスの介入を招くやり方で南・中央アフリカを改革することに成功した。」⁷⁴⁾

リヴィングストンが、ケープ・コース戦争や既存の植民地に対する彼の批判を削除せずにいたら、本書が帝国主義の幻想に対してこのように訴えかけていたとは考えにくい。今は憶測することしかできないが、『宣教師の旅』のなかでこれらの重要な言葉が残されていたならば、アフリカに対するその後の帝国主義政策の影響は何か変わっていたのではないだろうか。政策を鼓舞するよりむしろ抑制した可能性がある。

本稿Ⅲの3で掲げた第三の課題、すなわち作家としてのリヴィングストンを考察する意義は十分にあり。原稿から出版までの過程は、リヴィングストン本人と彼の書物の両方に対する私たちの理解を複雑にする。著者と出版社とのやり取りが証明するように、『宣教師の旅』は交渉の産物だった。広範な読者を引き付け、自分の目的に合ったスタイルを見つめたいと願ったリヴィングストンは、干渉されることを嫌い、大衆の目に映る自身の姿に気を配った。彼の文意の奥深さや彼が望んだ自己像も興味深い。帝国の取り組みというテーマを扱う箇所に編集が行われることになったのには、リヴィングストンのセルフイメージへの関心や文学市場への意識、出版社の思惑が影響している。これら全ては、人々から高く賞賛され、著者が一躍有名人になることに貢献した『宣教師の旅』へなされた配慮であり、要するに、潜在的に厄介な話題は削除されたのだ。リヴィングストンをあらためて深く考察するにあたり、『宣教師の旅』に対して尋ねるべき重要な問いは、そこに書かれている内容はもとより、書かれていない内容についてではないだろうか。

以上概観した、とくに日本においてまだ精力的に取り組まれたことのないこれらのリヴィングストン研究全体を通じて期待されうるのは、多くの一次資料や先行研究より知見を得ながら、リヴィングス

トン・リヴィングストンたらしめた知的文脈と、彼の活動の実際とを関連づけ、それにより透かし見られる真実のリヴィングストンを、ときに必然の姿において捉えつつも、彼の思想と言説を詳細にたどることを通じ、これまで理解されていたリヴィングストン像とは異なる新たな視点で回想することである。

アンナ・マリー・ジリスが紹介するウィスニキの次の言葉は大切な視座を私たちに与えてくれる。「テクノロジーの進歩により、リヴィングストンのテキストを復元することができるようになった。今後リヴィングストン研究はどのようなことが可能になるだろうか。ウィスニキ氏は、研究者たちは19世紀の偉大な人物の一人であるリヴィングストンの肖像画を、今まで以上に微妙に描くことができるようになり、そしてそれは最終的に、より人間的で、より複雑な肖像画になるだろうと述べている。⁷⁵⁾」

注

- 1) 紙巾の制限上、注における先行のリヴィングストンの伝記、それらの邦訳紹介等は割愛させていただいた。なお、リヴィングストンの著作、日記集、書簡集、講演記録、リヴィングストンのマニュスクリプトの主要な保管機関、英語圏で出版された代表的なリヴィングストンの伝記と研究文献、関連資料については、ティム・ジールによる詳細な紹介を参照されたい。Jeal, Tim., *Livingstone*, Yale University Press, 2013, pp.400-403.
- 2) Smiles, Samuel, *Self-Help*, John Murray, 1908, pp.284-289. 最初の邦訳は、斯邁爾斯『西國立志編 原名自助論』(中村敬太訳, 同人社, 1871年, 19-24頁)に掲載されている。
- 3) Blaikie, William Garden, *The Personal Life of David Livingstone*, Fleming H. Revell Company, 1880.
- 4) 内村鑑三『後世への最大遺物』, 便利堂, 1897年, 36-38頁。内村は、「私は彼を宗教家あるいは宣教師と見るよりは、むしろ大企業家として尊敬せざるをえません。もし私は金を溜めることができなかったならば、或は又土木事業を起すことが出来ぬならば、私はデビッド・リビングストンのような事業をしたいと思ひます」と述べている。同書, 36-37頁。
- 5) 有島武郎, 森本厚吉『リビングストン傳』, 警醒社書店, 1901年。
- 6) 初版はつぎのものである。Stanley, Henry Morton, *How I found Livingstone: travels, adventures and discoveries in Central Africa: including an account of four months' residence with Dr. Livingstone*, Scribner, Armstrong & Co., 1872.
- 7) 竹内幸雄, 「リヴィングストン, スタンレー, そし

て「博愛と通商」(『歴史評論』, 5巻, 469号, 1989年, 61-68頁), 溝口昭子, 「Not so much of what has been done, as of what still remains to be performed: "emptiness" in David Livingstone's missionary travels and researches in south Africa (1857)」(『英米文学評論』, 53巻, 2007年, 75-98頁), 岡倉登志, 「ナイルの水源を求めてーリヴィングストン博士の奥地探検を中心に」(窪田憲子, 木下卓, 久守和子編著, 『旅にとり憑かれたイギリス人: トラヴェルライティングを読む』, ミネルヴァ書房, 2016年, 193-213頁) などがある。

- 8) 藤田緑, 「リヴィングストンの見る東アフリカのアラブ商人」(『国際文化研究科論集』, 7巻, 1999年, 57-71頁) などがある。
- 9) 内田真木, 「有島武郎・森本厚吉のリヴィングストン理解について」, 『日本比較文学会東京支部研究報告』, 9号, 2012年, 19頁。
- 10) 有島, 森本, 前掲書, 49頁。
- 11) 同前書, 50頁。
- 12) 有島と森本が底本としたリヴィングストンの探検記の初版は次のものである。Livingstone, David, *Missionary Travels and Researches in South Africa: including a sketch of sixteen years' residence in the interior of Africa, and a journey from the Cape of Good Hope to Loanda, on the west coast, thence across the continent, down the river Zambesi, to the eastern ocean*, John Murray, 1857.
- 13) 瀬沼茂樹, 「有島武郎ー『リビングストン伝』をめぐって」(『理想』, 328号, 1960年, 42-49頁), 内田真木, 前掲書, 尾西康充, 「有島武郎と内村鑑三ー『リビングストン伝』第四版序言の根底にあるもの」(『キリスト教文学研究』, 28号, 2011年, 43-55頁), 杉山直人, 「<研究ノート>有島武郎・森本厚吉著『リビングストン傳』(1901 [M34] 年)を読む: サムライ道徳と21世紀の『リビングストン伝』」(『国際学研究』, 7巻, 1号, 2018年, 99-109頁) などがある。
- 14) Clendennen, Gary W. and Cunningham, I.C., *David Livingstone: a catalogue of documents*, National Library of Scotland for the David Livingstone Documentation Project, 1979.
- 15) Cunningham, I.C., *David Livingstone: a catalogue of documents: a supplement*, Edinburgh, National Library of Scotland for the David Livingstone Documentation Project, 1985.
- 16) Clendennen, Gary. and Casada, James A., "The Livingstone Documentation Project," *History in Africa*, Vol. 8, Cambridge University Press, 1981, pp.309-317.
- 17) Gillis, Anna Maria., "Livingstone in a New Light," The National Endowment for the Humanities, <https://www.neh.gov/humanities/2010/septemberoctober/feature/livingstone-in-new-light> (accessed 2019-12-20).

- 18) Livingstone Online, <https://livingstoneonline.org/> (accessed 2019-12-20).
- 19) リヴィングストン・オンラインが誕生するまでの詳細な経緯については、次の解説を参照されたい。
Ashanka Kumari and Adrian S. Wisnicki., "A Brief History of Livingstone Online (2004-2013)", Livingstone Online, <https://livingstoneonline.org/about-this-site/brief-history-livingstone-online-2004-2013> (accessed 2019-12-20)
- 20) "Adrian S. Wisnicki," University of Nebraska-Lincorn, <https://www.unl.edu/english/adrian-s-wisnicki> (accessed 2019-12-20).
- 21) "Dr. Livingstone, Illuminated," The National Endowment for the Humanities, <https://www.neh.gov/news/dr-livingstone-illuminated> (accessed 2019-12-20).
- 22) リヴィングストンは30年にわたり、イギリスから1万キロ以上離れたアフリカの地で過ごした。今日の南アフリカ、ボツワナ、ザンビア、アンゴラ、ジンバブエ、マラウイ、モザンビーク、タンザニア、コンゴの地域を訪れ、現地の人々と交流し、多くの地理学的発見を成し遂げ名声を博した最初のヨーロッパ人となった。
- 23) Bridges, Roy C., "Review of *David Livingstone: A Catalogue of Documents*," *The Scottish Historical Review* 60, 170. 2, Edinburgh University Press, 1981, pp.201-202.
- 24) McCracken, John., *Politics and Christianity in Malawi 1875-1940: The Impact of the Livingstonia Mission in the Northern Province*, Cambridge University Press, 1977.
- 25) Du Toit, Andre., "No Chosen People: The Myth of the Calvinist Origins of Afrikaner Nationalism and Racial Ideology," *American Historical Review*, 88. 4, Oxford University Press, 1983, pp.920-952.
- 26) Pearce, G.D., "Livingstone and Fungi in Tropical Africa," *Bulletin of the British Mycological Society*, 19. 1, The British Mycological Society, 1985, pp.39-50.
- 27) Sheriff, Abdul., *Slaves, Spices and Ivory in Zanzibar: Integration of an East African Commercial Empire into the World Economy 1770-1873*, Ohio University Press, 1987.
- 28) Helly, Dorothy O., *Livingstone's Legacy: Horace Waller and Victorian Mythmaking*, Ohio University Press, 1987.
- 29) Cashdan, Elizabeth., "Trade and Its Origins on the Botletli River, Botswana," *Journal of Anthropological Research*, 43. 2, University of Chicago Press, 1987, pp.121-38.
- 30) Rijpma, Sjoerd., "Malnutrition in the History of Tropical Africa," *Civilisations*, 43. 2, Institut de sociologie de l'Universite Libre de Bruxelles, 1996, pp.45-63.
- 31) Bridges, Roy C., "Explorers' Texts and the Problem of Reactions by Non-Literate Peoples: Some Nineteenth-Century East African Examples," *Studies in Travel Writing* 2, Nottingham Trent University, 1998, pp.65-84.
- 32) Endfield, Georgina H., and David J. Nash., "Drought, Dessication and Discourse: Missionary Correspondence and Nineteenth-Century Climate Change in Central Southern Africa," *Geographical Journal*, 168. 1, Royal Geographical Society, 2002, pp.33-47.
- 33) Flint, Lawrence S., "State-Building in Central Southern Africa: Citizenship and Subjectivity in Barotseland and Caprivi," *International Journal of African Historical Studies*, 36. 2, African Studies Center, Boston University, 2003, pp.393-428.
- 34) Larner, Andrew J., "Ophthalmological Observations Made During the Mid-19th-Century European Encounter with Africa," *Arch Ophthalmol*, 122, American Medical Association, 2004, pp.267-72.
- 35) Dritsas, Lawrence., "From Lake Nyassa to Philadelphia: A Geography of the Zambesi Expedition, 1858-64," *British Journal for the History of Science*, 38. 1, Cambridge University Press, 2005, pp.35-52.
- 36) Koivunen, Leila., *Visualizing Africa in Nineteenth-Century British Travel Accounts*, Routledge, 2009.
- 37) Wisnicki, Adrian S., "Livingstone's 1871 Field Diary: A multispectral critical edition, Beta edition: 2011, First edition & corrections: 2012-13, Updated: 2017," Livingstone Online, <https://livingstoneonline.org/spectral-imaging/livingstones-1871-field-diary> (accessed 2019-12-20)
- 38) 19世紀イギリスの探検文化について考察したフィリックス・ドライパーは、リヴィングストンとスタンリーは、姿勢は異なっていたが両者とも文化帝国主義を体现した人物だと述べている (Driver, Felix., "David Livingstone and the Culture of Exploration in Mid-Victorian Britain" Skipwith, Joanna and MacKenzie, John M. (eds.), *David Livingstone and the Victorian Encounter with Africa*, National Portrait Gallery, London, 1996, p.131.)。歴史家のアンドリュー・ポーターは、今では国境となっている地域を難無く越えて行われたリヴィングストンの遠征事業を、「アフリカ争奪戦とその究極の結果であるアフリカ分割を予期するもの」と評している。(Porter, Andrew., *Religion versus Empire? British Protestant Missionaries and Overseas Expansion, 1700-1914*, Manchester University Press, 2004, p.184.)
- 39) Jeal, Tim., *Livingstone*, Pimlico, 1994, pp.22-23.

- 40) 並河葉子, 「西アフリカにおけるチャーチ・ミッションリー・ソサエティーの活動とイギリス福音主義」, 『西洋史学』, 181号, 1996年, 34頁。
- 41) Barclay, Oliver., *Thomas Fowell Buxton and the Liberation of Slaves*, The Ebor Press, 2001, p.3, p.138.
- 42) 慈善事業, 社会事業としてデールの功績がもっとも顕著に示されたことのひとつは, その教育活動だろう。繊維業界の経営者たちは安い労働力を求めて多くの子供を雇った。デールの工場でも大勢の子供たちが働いており, 孤児院から来た子供たちも多数含まれていた。デールの綿紡績工場には学校と寄宿舎が併設され, 工場の子供たちだけではなく, 日中は地域の子供たちにも教育の場が提供された。子供たちは清潔な衣服を与えられ, 規則正しく健康的に生活するよう指導されていた。実践されていた教育も充実しており, イギリスで幼児教育を含む系統だった進歩的な学校教育の体制が工場共同体に作られたものとしては, デールの工場併設学校が始めての試みだったといわれている。(Davidson, Lorna, *The Story of New Lanark*, New Lanark Conservation, 1993, p.4.) リヴィングストンは, 「望ましい教育が行われており, 多くの人々が恩恵をこうむった。当時の仲間たちのなかには, 学校に入学したときと比べてはるかに高い社会的地位にしている人もいる。このような機関がイギリス中に創設されれば, 貧しい人々に永遠の恵がもたらされるだろう」と述べている。(Livingstone, David., *op.cit.* p.7.)
- 43) Livingstone, David., *ibid.*, p.9.
- 44) Calder, Angus., "Livingstone, Self-Help and Scotland", Skipwith, Joanna and Mackenzie, John M. (eds.), *op.cit.*, p.90. リヴィングストンは, 「紡績工場で働いていたころを振り返り, その時期が私の若い時の非常に重要な部分をなしていたことを感謝せずにはいられない。私は生まれ変わったとしても, 過去とまったく同じように質素な生活環境のなか, つつましく実直に自己鍛錬に励むような生き方から人生を始めたいと思う」と回想している。(Livingstone, David., *ibid.*, p.10.)
- 45) リヴィングストン家は代々プロテスタントで, 彼の父はスコットランド教会に属する厳格なカルヴァン主義者だったが, 後に離脱しハミルトンの独立教会主義の教会へ移り, 他界するまでの20年間執事を務めた。そこはスコットランドの会衆派の伝統の起源ともいわれている古スコットランド独立派 (The Old Scots Independents) の教会で, 規模は小さいながら, ロンドン宣教教会の海外活動に多くの人材を送り出していた組織でもあった。ロンドン宣教教会は, 福音主義復興運動から直接に影響を受け1795年に設立されたニュー・ディセント (New Dissent) と呼ばれる新興団体だった。宗派にはこだわらず異教徒たちに神の福音を教え広めることを活動理念としていた。
- 46) 津崎哲雄, 「トーマス・チャーマーズの信仰と実践」, 『基督教社会福祉学研究』, 21号, 1989年, 9-21頁。
- 47) 松永俊男『ダーウィン前夜の進化論争』, 名古屋大学出版会, 2005年, 104-105頁。
- 48) 狩太村にあった有島農場は, 有島武郎の父, 有島武が, 広大な土地の貸し下げを受けて拓いたものだ (第1農場・第2農場合わせて約450ヘクタール, 現・ニセコ町)。明治政府に出仕した武は, 大蔵省で関税の制度づくりなどに取り組み, 欧米へも派遣された。日本鉄道 (株) や日本郵船 (株) などの役員として実業界で活躍した。有島武郎は東京の学習院中等科を卒業後, 1896 (明治29) 年に札幌農学校に入学した。武は長男の武郎が北海道にいることを動機のひとつに, やがて鉄道の開通が近いことがわかっていた羊蹄山麓に大きな農場を開いた。
- 49) 有島武郎, 「小作人への告別」, 『有島武郎全集』, 7巻, 叢文閣, 1924・5年, 116-117頁。
- 50) 植栗弥著, 「有島武郎のクロボトキン訪問の期日と場所—ロンドンでの調査の報告と若干の考察」 (有島武郎研究会編『有島武郎研究』, 2号, 1998年, 27-39頁), 栗田廣美, 「有島武郎『叛逆者』と〈中世への共感〉—クロボトキン・大逆事件に関連しつつ」 (『日本文学』, 34巻, 7号, 1985年, 52-60頁), 小玉晃一, 「有島武郎とクロボトキン」 (『論集』, 2号, 1961年, 117-134頁), 高山亮二『有島武郎研究: 〈農場〉〈家〉への視点を中心にして』 (明治書院, 1972年), 同『新訂版 有島武郎研究: 農場解放の理想と現実』 (明治書院, 1984年), 同『有島武郎の思想と文学: クロボトキンを中心に』 (明治書院, 1993年) などがある。
- 51) 栗田, 同書, 54頁。
- 52) 内田, 前掲書, 20-21頁。
- 53) P. A. クロボトキン (大窪一志訳) 『相互扶助再論』, 同時代社, 2012年, 259-260頁。
- 54) Kropotkin, Peter Aleksjejevich, "The Theory of Evolution and Mutual Aid," *The Nineteenth Century and After*, C. Kegan Paul & Co., 1910, p.98.
- 55) Livingstone, David., *op.cit.*
- 56) 初版の12000部は瞬く間に完売し, 2刷 (8000部) と3刷 (11000部) がすぐに増刷された。その後の再販により, 最初の2年間の売上高は70000部に達した。リヴィングストン・オンライン, および関連プロジェクトのディレクターで, リヴィングストンのマニユスクript研究の第一人者であるエイドリアン・ウィスニキは, これまで様々な研究者が「事実に基づく宣教師の旅物語を, テキストとして, また成功秘話として注目してきた」と述べている。(Wisnicki, Adrian S., "Interstitial Cartographer: David Livingstone and the Invention of South Central Africa," *Victorian Literature and Culture*, 37, Cambridge University Press, 2009, p.256.)
- 57) Bivona, Daniel., *British Imperial Literature, 1870-1940: Writing and the Administration of Empire*, Cambridge University Press, 1998, p.47.

- 58) *Ibid.*, p.48. ティム・バリンジャーは、『宣教師の旅』に不可欠な冒険物語と宣教の道のりとの相互作用は、リヴィングストンの成功にとって重要だった。これらのアイデンティティとヒロイズム、宗教的信念との結びつきを見事に融合させたのはまさに彼の能力であり、それがヴィクトリア時代の一般読者にとって彼を非常に魅力的なものにした」と述べている。(Barringer, Tim., "Fabricating Africa: Livingstone and the Visual Image 1850-74", Skipwith, Joanna and Mackenzie, John M. (eds.), *op.cit.*, p.179.)
- 59) Ransford, Oliver., *David Livingstone: The Dark Interior*, John Murray, 1978, p.135.
- 60) Livingstone, Justin., "Missionary Travels, missionary travails: David Livingstone and the Victorian publishing industry", *David Livingstone: man, myth and legacy*, Worden, Sarah(ed), National Museums Scotland, 2012, p.39.
- 61) Wisnicki, Adrian S., *op.cit.*, p.257.
- 62) フェリックス・ドライバーは、「リヴィングストンの神話の力は、正確にはこれらすべての異なる関心に同時に応えたという事実によって示されている」と述べている。(Driver, Felix., *Geography Militant: Cultures of Exploration and Empire*, Blackwell, 2001, p.73.)
- 63) リヴィングストンは編集の過程で幾度も、作品が子供向けの本になることを懸念していた。彼は1856年5月30日に、改編後の本文は感傷的なものとなり、力強さが欠けていると説明している。翌日にも彼は繰り返し異議を唱えた。「私は、他の事については気難しくもなく、扱いにくい人間でもないが、この本を改ざんすることや、男性的な強さを取り払うようないかなる試みについても積極的に抵抗しなければならぬ。」(Livingstone, Justine., *op.cit.*, pp.41-42.)
- 64) 例えば雑誌エラは、読者を芸術的效果で魅惑するような「ごまかしの技術」で構成された作品と比較し、リヴィングストンの著作を好意的に評価している。(Era, "Missionary Travels and Researches in South Africa", 28 March, 1858, p.10.) 同様にグラスゴーヘラルドは、リヴィングストンの記述スタイルを、「明快で切れがあり、活気にあふれており、みせかけの装飾がない文章」と賞賛した。(Glasgow Herald, "Dr. Livingstone's Missionary Travels and Researches in South Africa", 11 November, 1857, p.2.)
- 65) *Caledonian Mercury*, "Literature", 4 December, 1857, p.2.
- 66) 探検家の話が常に信頼性の問題に悩まされてきたことをかかると、リヴィングストンの文体の特徴は重要なことだろう。旅が行われた現場と、旅行記の読者がいる場所との距離を考えると、旅人の主張が正しいのかどうか容易に判断することができないことがわかる。スティーブン・シャピンは旅行家や旅行記が抱えていたこの問題を「信頼性ハンディキャップ」と呼んでいる。(Shapin, Steven., *A Social History of Truth: Civility and Science in Seventeenth-Century England*, University of Chicago Press, 1994, p.246.) 旅行記作家の信頼性は、多くの場合、その人の社会的地位や功績、道徳的資質で評価された。チャールズ・ウィザーズは、「旅行記が信頼と信憑性を確保するために重要なことは、単に語っている内容だけではなく、執筆者と読者のコミュニケーションの有りようである」と述べている。(Withers, Charles W. J., "Travel and Trust in the Eighteenth Century", *L' Invitation Au Voyage: Studies in Honour of Peter France*, Renwick, J. (ed.), Voltaire Foundation, 2000, pp.47-54.)
- 67) スタンリーとのドラマチックな出会いや殉教のような死のおかげで、後年リヴィングストンへの信仰は急速にリニューアルされたが、ティモシー・ホームズは、リヴィングストンの言説は楽天主義であり、その内容はほぼユートピアだったと指摘している。(Holmes, Timothy., *Journey to Livingstone: Exploration of an Imperial Myth*, Canongate, 1993, p.351.)
- 68) Livingstone, Justine., *op.cit.*, pp.44-45.
- 69) 労働者たちに深く同情したリヴィングストンは、誰からどのような圧力を受けようとも、自分はあらゆる弾圧を非難すると宣言している。彼は工場の生活と奴隷制を並べて議論することを避けたが、それは、弾圧という考えに血を煮えたぎらせる奴隷の話を引き合いに出すのは不適切だと考えたからだった。実際、出版された『宣教師の旅』では次の重要な文が省かれていた。「奴隷制を課するような人間はどんな者でも、奴隷の復讐を避けることはできないだろう。」(*Ibid.*, pp.44-45.)
- 70) *Ibid.*, p.45.
- 71) リヴィングストンは、「もし我々が戦いの政策に従うならば、グラハムズタウンとティンブクトゥ間のすべての人々を解放した時にのみ恒久的な平和を望むことができるが、現在の軍事的成功から判断すると、そのような状況は千年先延ばしになるだろう」と述べている。(Ibid.)
- 72) 事実リヴィングストンは、進行中だった紛争に対するコーサ族の考えに注目しており、最高酋長サンディルのスピーチを長々と引用するほどだった。「聖書なしで生きる白人はいない。この本を与え、血を考えるように命じたのは神である。白人たちが来て、黒人が盗みをしたと言うが、その白人のほうが盗人だ。神は海に境界を作り、白人たちが海を渡り、我々から国を奪う。(中略)彼らは悪い行いをする。だから我々はイギリス人にうんざりしている。」(*Ibid.*)
- 73) *Ibid.*
- 74) Wisnicki, Adrian S., *op. cit.*, p.256, p.267.
- 75) Gillis, Anna Marie., "Livingstone in a New Light," The National Endowment for the Humanities, <https://www.neh.gov/humanities/2010/septemberoctober/feature/livingstone-in-new-light> (accessed 2019-12-20).